

**IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE**

Applicant(s):	Eiki NIIDA, Fumikazu ISOGAI, Toshihiko TSUZUKI, Minoru TOEDA, Noriyuki BESSHI, and Yasuya MITA		
Serial No.:	TBA	Group Art Unit:	TBA
Filed:	Herewith	Examiner:	TBA
For:	OPTICAL WAVEGUIDE, AREA LIGHT SOURCE DEVICE AND LIQUID CRYSTAL DISPLAY DEVICE		
Customer No.:	27123		

### CLAIM TO CONVENTION PRIORITY

Mail Stop Patent Application  
Commissioner for Patents  
P.O. Box 1450  
Alexandria, VA 22313-1450

Sir:

In the matter of the above-identified application and under the provisions of 35 U.S.C. § 119 and 37 C.F.R. § 1.55, applicant(s) claim(s) the benefit of the following prior application(s):

Application(s) filed in: Japan  
In the names of: KABUSHIKI KAISHA TOYOTA JIDOSHOKKI  
Serial No(s): 2003-040054  
Filing Date(s): February 18, 2003

Application(s) filed in: Japan  
In the names of: KABUSHIKI KAISHA TOYOTA JIDOSHOKKI  
Serial No(s): 2003-206700  
Filing Date(s): August 8, 2003

☒ Pursuant to the Claim To Priority, applicant(s) are submitting a duly certified copy of each of the said foreign applications herewith.

Respectfully submitted,  
MORGAN & FINNEGAN, L.L.P.

Dated: February 17, 2004

By: Steven F. Meyer  
Steven F. Meyer  
Registration No. 35,613

**Correspondence address:**  
MORGAN & FINNEGAN, L.L.P.  
345 Park Avenue  
New York, NY 10154-0053  
(212) 758-4800 Telephone  
(212) 751-6849 Facsimile

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2003年 2月18日  
Date of Application:

出願番号 特願2003-040054  
Application Number:

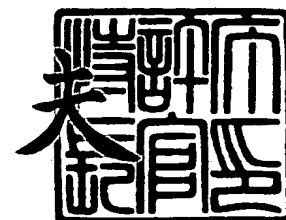
[ST. 10/C]: [JP 2003-040054]

出願人 株式会社豊田自動織機  
Applicant(s):

2003年12月 8日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今井 康



出証番号 出証特2003-3101341

【書類名】 特許願

【整理番号】 E-01691

【提出日】 平成15年 2月18日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 F21V 8/00 601  
G02B 6/00 331  
G02F 1/13357

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地 株式会社 豊田自動  
織機 内

【氏名】 仁井田 英紀

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地 株式会社 豊田自動  
織機 内

【氏名】 磯谷 文一

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地 株式会社 豊田自動  
織機 内

【氏名】 都築 敏彦

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地 株式会社 豊田自動  
織機 内

【氏名】 三田 泰哉

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地 株式会社 豊田自動  
織機 内

【氏名】 戸枝 稔

**【発明者】**

**【住所又は居所】** 愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地 株式会社 豊田自動  
織機 内

**【氏名】** 別芝 範之

**【特許出願人】**

**【識別番号】** 000003218

**【氏名又は名称】** 株式会社 豊田自動織機

**【代表者】** 石川 忠司

**【手数料の表示】**

**【予納台帳番号】** 000620

**【納付金額】** 21,000円

**【提出物件の目録】**

**【物件名】** 明細書 1

**【物件名】** 図面 1

**【物件名】** 要約書 1

**【プルーフの要否】** 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 導光板

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 点状光源から出射された光を入射するとともに、面状に変換して出射する導光板であって、

入射された光を拡散させる導入部と、

前記導入部に連続して形成され、導入された光を出射する出射面及びその反対側に形成された反射部を有する板状の採光部とを備え、

前記導入部は、その反採光部側から採光部側に向かって広がる対称形状に形成されるとともに、前記導入部の幅方向に延びる面と平行な平面と点状光源からの光を拡散させる拡散部とが交互に繰り返して構成され且つ前記点状光源と対向する入射部と、前記拡散部で拡散された光を前記採光部に向けて反射する反射部とを備えている導光板。

【請求項 2】 前記拡散部は、前記入射部から前記採光部に向かう方向に凹形状の V 型溝である請求項 1 に記載の導光板。

【請求項 3】 前記拡散部は、前記入射部から反採光部側に向かう方向に延びる三角柱状の凸部である請求項 1 に記載の導光板。

【請求項 4】 前記反射部は平面であり、前記導入部の幅方向に延びる面とのなす角の角度が 40 度から 50 度である請求項 1 ～請求項 3 のいずれか一項に記載の導光板。

【請求項 5】 前記入射部のうち、前記導入部の幅方向に延びる面と平行な平面が占める割合が、35%から55%である請求項 1 ～請求項 4 のいずれか一項に記載の導光板。

【請求項 6】 前記 V 型溝を構成する面と、前記入射部において前記 V 型溝に隣接する平面とのなす角の角度が 130 度から 145 度である請求項 2、請求項 4 および請求項 5 のいずれか一項に記載の導光板。

【請求項 7】 前記凸部を構成する三角柱の面と、前記入射部において前記凸部に隣接する平面とのなす角の角度が 130 度から 145 度である請求項 3 から請求項 5 のいずれか一項に記載の導光板。

【請求項 8】 前記導入部が複数隣接して形成されている請求項 1 から請求項 7 のいずれか一項に記載の導光板。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、導光板に係り、詳しくは LED（発光ダイオード）等の点状光源からの出射光を入射して面状に出射する導光板に関する。

【0002】

【従来の技術】

液晶表示装置として液晶表示パネル（液晶パネル）の背面（表示面と反対側の面）に面光源装置をバックライトとして配置したものがある。この種の面光源装置として、透光性の高い材料で形成された導光板の端面に沿って蛍光管（冷陰極管）を配置したものが使用されている。しかし、液晶表示装置の薄型化に伴い蛍光管の径を非常に小さくする必要があり、これに伴って小さな衝撃によっても蛍光管が破損し易くなる。また、光源として蛍光管を発光させるには高電圧が必要であるため、複雑な点灯回路が必要になるという問題がある。そこで、蛍光管を使用する構成に代えて、面光源装置として、LED が導光板の端面と対向して配置され、導光板の表面（液晶パネルと対向する側の面）から光が面状に出射されるエッジライト方式（サイドライト型）の装置が提案されている。しかし、LED は指向性が強いため、1 個の LED で幅の広い導光板に均一に光を入射させることが困難である。そこで、1 個又は少ない数の LED を使用して導光板から光を均一な面状で出射させるための導光板が提案されている（例えば、特許文献 1 参照）。

【0003】

特許文献 1 に記載の板状部材（導光板）は、図 6 に示すように、端面の点状光源 31 と対向する領域に複数の溝 32 を設けている。そして、この溝 32 によって、点状光源 31 からの光を振り分けて、板状部材 30 の出射面と平行な面内において照明光を広げている。これにより、点状光源間に暗部ができたり、逆に点状光源の正面に明部ができたりすることがなくなり、板状部材 30 から出射され

る光の輝度ムラを低減することができる。

【0004】

【特許文献1】

特開平10-29320b号公報

【0005】

【発明が解決しようとする課題】

ところが、特許文献1の構成では、溝32によって振り分けられた光は、板状部材30の点状光源31と対向する端面33と垂直ではない光が多く、点状光源31と対向する端面33とほぼ平行に導波する光を、板状部材30から出射させることが困難となる。このため、点状光源31の近傍に局所的に輝度ムラが発生してしまう。また、板状部材30の内部を導波する際に、端面33と垂直な端面34に達した光の一部は、端面34から外部に出射されてしまう。更に、板状部材30の内部を導波する光も端面33、34で反射を繰り返すため、経路が長くなり、減衰も大きくなってしまう。このため、光の利用効率がよくないという問題点があった。

【0006】

本発明は前記の問題点に鑑みて成されたものであって、その目的は、点状光源を用いた導光板において、出射効率を低減させることなく、光源近傍に発生する輝度ムラを低減することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】

前記の目的を達成するため、請求項1に記載の発明は、点状光源から出射された光を入射するとともに、面状に変換して出射する導光板であって、入射された光を拡散させる導入部と、導入部に連続して形成され、導入された光を出射する出射面及びその反対側に形成された反射部を有する板状の採光部とを備え、導入部は、その反採光部側から採光部側に向かって拡がる対称形状に形成されるとともに、導入部の幅方向に延びる面と平行な平面と点状光源からの光を拡散させる拡散部とが交互に繰り返して構成され且つ前記点状光源と対向する入射部と、拡散部で拡散された光を採光部に向けて反射する反射部とを備えていることを特徴

とする。

#### 【0008】

この発明によれば、点状光源からの光の一部が、導入部に設けられた拡散部によって拡散されるため、導光板全体に光を導波させることができ、点状光源間に暗部ができたり、逆に点状光源の正面に明部ができたりすることともなくなり、導光板から出射される光の点状光源近傍に発生する輝度ムラを低減することができる。

#### 【0009】

また、点状光源からの光のうち、導入部の幅方向に延びる面と平行な平面から導光板に入射した光の多くは、直接導入部から反導入部側に向かって導入部の幅方向に延びる面と垂直に近い角度で導波する。一方、点状光源からの光のうち、拡散部から導光板に入射した光の多くは、拡散部によって拡散され、拡散された光は、反射部に到達して、反射部で導入部の幅方向に延びる面とほぼ垂直な方向に反射されて、導光板の反導入部方向に導波する。従って、点状光源からの光の多くはその経路によらず、導入部の幅方向に延びる面と垂直に近い角度で導波するため、導入部の幅方向に延びる面と垂直な端面から外部に出射されてしまう光や、導光板を導波する際の光の減衰を最小限にすることができる。

#### 【0010】

更に、反射部は点状光源間に位置するため、導光板のうち、点状光源間に位置する部分にも十分な光が導波する。これによっても、輝度ムラは低減される。

#### 【0011】

請求項2に記載の発明は、請求項1に記載の発明において、拡散部が、入射部から採光部に向かう方向に凹形状のV型溝であることを特徴とする。

#### 【0012】

この発明によれば、単純な形状により、点状光源からの光を効果的に拡散させることが可能となる。このため、導光板の設計や製造に要する工数を低減することができる。

#### 【0013】

請求項3に記載の発明は、請求項1に記載の発明において、拡散部が、前記入



射部から反採光部側に向かう方向に延びる三角柱状の凸部であることを特徴とする。この発明によれば、請求項 2 に記載の発明と同様の効果を奏する。

【0014】

請求項 4 に記載の発明は、請求項 1 ～請求項 3 のいずれか一項に記載の発明において、反射部が平面であり、導入部の幅方向に延びる面とのなす角の角度が 40 度から 50 度であることを特徴とする。

【0015】

この発明によれば、拡散部で拡散された光の多くを、導入部の幅方向に延びる面とほぼ垂直な方向に反射することができ、光の利用効率を向上することができる。

【0016】

請求項 5 に記載の発明は、請求項 1 ～請求項 4 のいずれか一項に記載の発明において、入射部のうち、導入部の幅方向に延びる面と平行な平面が占める割合が 35 % から 55 % であることを特徴とする。

【0017】

この発明によれば、導入部において拡散される光と拡散されない光の割合を向上でき、輝度ムラを更に低減することができる。

【0018】

請求項 6 に記載の発明は、請求項 2、請求項 4 および請求項 5 のいずれか一項に記載の発明において、V 型溝を構成する面と、入射部において V 型溝に隣接する平面とのなす角の角度が 130 度から 145 度であることを特徴する。

【0019】

この発明によれば、V 型溝によって拡散される光の方向を最適化することができる。輝度ムラを更に低減することができる。

【0020】

請求項 7 に記載の発明は、請求項 3 から請求項 5 のいずれか一項に記載の発明において、凸部を構成する三角柱の面と、入射部において凸部に隣接する平面とのなす角の角度が 130 度から 145 度であることを特徴とする。この発明によれば、請求項 6 に記載の発明と同様の効果を奏する。

**【0021】**

請求項 8 に記載の発明は、請求項 1 ～請求項 7 のいずれか一項に記載の発明において、導入部が複数隣接して形成されていることを特徴とする。

**【0022】**

この発明によれば、点状光源の幅に比べて十分に広い幅を有する導光板についても、出射効率を低下させることなく、出射される光の輝度ムラを低減することが可能となる。

**【0023】****【発明の実施の形態】**

以下、本発明を液晶表示装置のサイドライト型のバックライトに使用される面光源装置の導光板に具体化した一実施の形態を図 1 ～図 4 に従って説明する。図 1 (a) は導光板の模式平面図、図 1 (b) は導入部を示す部分拡大図、図 2 は液晶表示装置の模式図である。また、図 3 及び図 4 は作用を示す模式平面図である。

**【0024】**

図 2 に示すように、液晶表示装置 11 は、液晶パネル 12 と、その背面（表示面と反対側の面）側に配置されたバックライトとしての面光源装置 13 とを備えている。面光源装置 13 は、導光板 14 と、導光板 14 の一方の端部と対向する位置に配置された点状光源 15 とを備えている。点状光源 15 としては LED が使用されている。

**【0025】**

面光源装置 13 には、導光板 14 を挟んで液晶パネル 12 と反対側に位置し、導光板 14 から漏れた光を導光板 14 に戻して出射光として利用するための反射部材（反射シート）16 が設けられている。また、導光板 14 と液晶パネル 12 との間には、光学シート 17 が配置されている。光学シート 17 としては、光拡散シート、レンズシート、プリズムシート、反射型偏光シート等が使用され、一般に組み合わせて使用されるが、模式的に 1 枚として図示している。

**【0026】**

次に導光板 14 について詳細に説明する。図 1 (a) 及び図 2 に示すように、

導光板 14 は、入射された光を拡散させる導入部 18 と、導入部 18 に連続して形成され、導入された光を出射する出射面 19a 及びその反対側に形成された反射面 19b を有する板状の採光部 19 とを備えている。反射面 19b は採光部 19 に入射した光を出射面 19a に向けて反射させる機能を有し、図示しない V 溝又は鋸歯状の溝により構成されている。導入部 18 は複数（この実施の形態では 6 個）隣接して形成されている。即ち、点状光源 15 一個当たりの導入部 18 の幅 W は点状光源 15 を配置する導光板 14 の端面の長さ（採光部 19 の幅）を点状光源 15 の数で割った値となる。導光板 14 は透明性の高い材料、例えばアクリル樹脂で形成されている。

#### 【0027】

図 1（b）に示すように、導入部 18 は、その反採光部側から採光部 19 側に向かって広がる対称形状に形成されるとともに、反採光部側端部に、基端の幅 K（図における左右方向の長さ）が点状光源 15 の幅よりもわずかに大きい入射部 20 を備えている。入射部 20 は点状光源 15 と対向するとともに、導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20a と点状光源からの光を拡散させる拡散部としての V 型溝 20b とが交互に等間隔で繰り返して構成されている。この実施の形態では、入射部 20 のうち、導入部 18 の幅方向に延びる面と平行な平面 20a が占める割合 D を 35%～55% の間の値としている。

#### 【0028】

V 型溝 20b は、入射部 20 から 19 採光部に向かう方向に凹形状の V 型に形成された溝である。V 型溝 20b を構成する面と、入射部 20 における平面 20a とのなす角の角度  $\theta$  は 130 度～145 度の間の値となっている。また、この実施の形態では、V 型溝 20b は、その頂部の間隔 P が 0.2 mm となるように、等間隔に配置されている。

#### 【0029】

入射部 20 と採光部 19 との間には、採光部 19 に向けて広がるように反射部としての反射面 23 が形成されている。反射面 23 は平面状である。そして、反射面 23 と導入部 18 の幅方向に延びる面 24 とがなす角の角度  $\alpha$  は 40 度～50 度の間の値となっている。

**【0030】**

次に前記のように構成された導光板 14 の作用について説明する。導光板 14 は、例えば、図 2 に示すように、透過型の液晶表示装置 11 のバックライトユニットとしての面光源装置 13 に組み込まれて使用される。

**【0031】**

点状光源 15 が点灯されると、点状光源 15 から出射した光が導光板 14 に入射し、入射した光は導光板 14 の出射面 19a から液晶パネル 12 に向かって出射され、光学シート 17 を経て液晶パネル 12 に入射される。そして、液晶表示装置 11 の使用者は液晶パネル 12 の表示をその出射光により視認する。

**【0032】**

導光板 14 における作用を詳しく説明すると、点状光源 15 から出射した光の大部分は入射部 20 に到達する。入射部に到達した光のうち一部は、導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20a から導入部 18 に入射される。導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20a から導入部 18 に入射された光の多くは、図 3 の A1, A2 で示す光のように、その進行方向が平面 20a とほぼ垂直であるため、導入部 18 及び採光部 19 の内部を、導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と垂直に近い角度で導波する。

**【0033】**

すなわち、導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20a から導入部 18 に入射された光の多くは、導光板 14 の幅方向とほぼ垂直な方向に導波する。このため、このような光は、導光板 14 の幅方向と垂直な端面 25 から出射されることもほとんどなく、また端面 25 で反射されることもほとんどない。従って、導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20a から導入部 18 に入射された光は、導光板 14 に入射されてから出射されるまで、導光板 14 の内部をほぼ最短距離で導波する。

**【0034】**

一方、入射部に到達した光のうち残りの一部は、V型溝 20b によって、反射面 22 に向けて屈折されて導入部 18 に入射される。そして、反射面 23 において、図 3 の B1, B2 で示される光のように、その多くは導光板 14 の幅方向と

ほぼ垂直な方向に反射される。

### 【0035】

従って、V型溝20bによって屈折されて導入部18に入射された光の多くも、導入部18の幅方向に延びる面24と平行な平面20aから導入部18に入射された光の場合と同様、導光板14に入射されてから出射されるまで、導光板14の内部をほぼ最短距離で導波する。

### 【0036】

また、このように反射面23で反射された光は、導光板14のうち、点状光源15と点状光源15との間に位置する部分（図4中の斜線で示された部分T1）を導波する。

### 【0037】

本願発明者は解析及び実験により、前記角度 $\alpha$ 、角度 $\theta$ 及び割合Dの好ましい範囲を検討した。その結果を次に説明する。なお、解析に使用した基本形状の各部の値として、表1の値を使用した。

### 【0038】

【表1】

項目	パラメータ	データ
反射面と導入部の幅方向に延びる面とのなす角	$\alpha$ [度]	45
V型溝を構成する面と、隣接する平面とのなす角	$\theta$ [度]	135
入射部のうち、平面の占める割合	D [%]	50
入射部の幅	K [mm]	4.4
V型溝のピッチ	P [mm]	0.2
導入部の最大幅	W [mm]	9
入射部と採光部との距離	h [mm]	3

表2は反射面と導入部の幅方向に延びる面24とのなす角の角度 $\alpha$ と輝度比との関係を示すグラフである。ここで、輝度比とは、点状光源15の近傍における輝度のうち、最大輝度と最小輝度との比である。輝度比が1.05以下であれば、実用上問題がないことが実験等により確認されている。

【0039】

角度 $\alpha$ が大きいほど、拡散部20bによって拡散された光は、反射部22によって、より広い範囲に反射される。このため、導光板14のうち点状光源15間に位置する部分T1では、輝度が下がる。反対に、 $\alpha$ が小さいほど、点状光源15間に位置T1する部分の輝度は上がる。従って、角度 $\alpha$ を調整することにより、点状光源15の正面に位置する部分（図4中のT2で示される部分T2）と、点状光源15間に位置する部分T1との輝度の比を調整することができる。

【0040】

そして、角度 $\alpha$ と輝度比との関係を調べた結果が表2である。表2から、角度 $\alpha$ の値が40度以上50度以下であれば、輝度比を1.05以下にできることが分かる。

【0041】

【表2】

$\alpha$ (度)	輝度比
30	1.3
35	1.1
40	1.05
45	1.03
50	1.02
52.5	1.1
55	1.15

表3は、V型溝20bを構成する面と平面20aとのなす角の角度 $\theta$ と輝度比との関係を示すグラフである。角度 $\theta$ が小さいと、V型溝20bで屈折された光は、反射面22に到達せず、隣接するV型溝20bに到達してしまい、導光板14の出射面19aから出射されなくなる。従って、この場合には、点状光源15間に位置する部分T1の輝度が低下する。反対に、角度 $\theta$ が大きいと、V型溝20bで屈折された光は、反射面22には到達せず、直接採光部19に到達してしまう。従って、この場合にも、点状光源15間に位置する部分T1の輝度が低下する。

**【0042】**

角度 $\theta$ と輝度比との関係を調べた結果を表3に示す。この結果から分かるように、角度 $\theta$ が130度以上145度以下であれば、輝度比を1.05以下とすることができる。

**【0043】****【表3】**

$\theta$ (度)	輝度比
125	1.1
127.5	1.07
130	1.04
135	1.03
140	1.02
145	1.05
150	1.1

表4は、入射部20において平面20aが占める割合Dと輝度比との関係を示したグラフである。平面20aが占める割合が大きいと、点状光源15からの光のうち、点状光源15の正面に位置する部分T2に導波する光が多くなる。反対に、平面20aの占める割合が小さく、V型溝20bの占める割合が大きいと、点状光源15間に位置する部分T1に導波する光が多くなる。このため、平面20aの占める割合を調整して、点状光源15の正面に位置する部分T2に導波する光の量と、点状光源15間に位置する部分T1に導波する光の量を均等にする必要がある。

【0044】

平面20aの占める割合Dと輝度比との関係を調べた結果を表4に示す。表4からも明らかなように、平面20aが占める割合が、35%以上55%以下であれば、輝度比を1.05以下にすることができる。

【0045】

【表4】

D (%)	輝度比
25	1.06
35	1.03
40	1.02
50	1.03
55	1.04
65	1.1
70	1.15

この実施の形態では以下の効果を有する。

【0046】



(1) 導光板 14 の導入部 18 は、その反採光部側から採光部 19 側に向かって広がる対称形状に形成されるとともに、反採光部側端部に入射部 20 を備えており、入射部 20 は点状光源 15 と対向するとともに、導入部 20 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20 a と点状光源 15 からの光を拡散させる V 型溝 20 b とが交互に等間隔で繰り返して構成されている。そして、点状光源 15 からの光のうち、平面 20 a を通って導光板 14 に入射した光は、どこでも反射することなく、導光板 14 の幅方向とほぼ垂直な方向に導波する。

#### 【0047】

従って、特許文献 1 に記載の発明のように、入射部全てに凹部を設けた場合と比べて、点状光源 15 の正面に位置する部分 T2 の輝度を高くすることができる。また、平面 20 a を通って導光板 14 に入射した光の多くは、導光板の幅方向と垂直な端面 24 から外部に出射したり、当該端面 24 において反射を繰り返しながら導光板 14 の内部を導波することではなく、出射面 19 a から出射されるまでほぼ最短距離で導波するため、光の減衰を最小限にすることができるとともに、導光板 14 に入射した光のうち出射面 19 a から出射される光の割合を多くすることができる、光の出射効率を高くすることができる。

#### 【0048】

(2) 入部 18 には、入射部 20 と採光部 19 との間に、採光部 19 に向けて広がるように平面状の反射面 23 が形成されている。点状光源 15 からの光のうち、V 型溝 20 b を通って導光板 14 に入射した光は、V 型溝 20 b によって、反射面 23 の方向に屈折される。そして、屈折された光の多くは、反射面 22 において、導光板 14 の幅方向とほぼ垂直な方向に反射される。

#### 【0049】

従って、V 型溝 20 b を通って導光板 14 に入射した光の多くも、平面 20 a を通って導光板 14 に入射した光の場合と同様、導光板の幅方向と垂直な端面 24 から外部に出射したり、当該端面において反射を繰り返しながら導光板 14 の内部を導波することではなく、出射面 19 a から出射されるまでほぼ最短距離で導波する。このため、光の減衰を最小限にすることができるとともに、光の出射効率を高くすることができる。また、反射面 22 は、点状光源 15 と点状光源 15

の間に位置し、反射面 22 で反射された光の多くは導光板の幅方向と垂直に導波するため、特許文献 1 に記載の発明と比べて、点状光源 15 間に位置する部分の輝度も高くすることができる。

【0050】

(3) 反射面 23 と導入部 18 の幅方向に延びる面 24 とがなす角の角度  $\alpha$  を 40 度から 50 度の間の値としている。従って、点状光源 15 の正面に位置する部分 T2 と点状光源 15 間に位置する部分 T1 との輝度の比を最適化することができ、出射面 19a における輝度ムラを更に低減することができる。

【0051】

(4) V型溝 20b を構成する面と平面 20a とのなす角の角度  $\theta$  を 130 度から 145 度の間の値としている。従って、V型溝 20b で屈折された光の導波する方向を最適化することができ、V型溝 20b で屈折された光のうち、反射面 22 に到達する光の割合を最大にすることができる。これにより、点状光源 15 間に位置する部分 T1 の輝度をより高くすることができる。

【0052】

(5) 入射部 20 において平面 20a が占める割合 D を 35% から 55% の間の値としている。従って、入射部 20 から導光板 14 の内部に入射した光のうち、点状光源 15 の正面に位置する部分 T2 に導波する光と点状光源 15 間に位置する部分に導波する光との割合を最適化することができ、輝度ムラを更に低減することができる。

【0053】

(6) 点状光源 15 からの光のうち、平面 20a を通って導光板 14 に入射した光も、V型溝 20b を通って導光板 14 に入射した光も、ともに、導光板 14 の幅方向と垂直に近い角度で導波する。従って、出射面 19a から出射される光の向きが揃っており、光学シートとして使用するプリズムシートを 2 枚一組で使用せずに 1 枚省略することもできる。

【0054】

(7) 導入部 18 が複数隣接して形成されている。従って、幅の広い導光板 14 へも、本発明を容易に適用することができる。

## 【0055】

実施の形態は前記に限定されるものではなく、例えば、次のように具体化してもよい。

## 【0056】

○ 拡散部はV型溝20bとしたが、V型の溝に限られるものではなく、例えば半楕円状の溝のような、V型溝と同様に点状光源15からの光を反射面22に向けて屈折する形状であればよい。この場合にも、V型溝20bと同様に、輝度ムラの低減を図ることができる。

## 【0057】

○ 拡散部は、また、図5に示すように、入射部から反採光部側に向かう方向に延びる凸形状であってもよい。凸部の形状は、図5に示すように、三角柱形状であってもよく、また半楕円柱形状等であってもよい。この場合にも、図5中のC1、C2で示される光のように、点状光源15からの光のうち凸部に到達した光は、凸部の側面において反射面22に向かう方向に屈折される。従って、拡散部を凸形状とした場合も、V型溝20b等の凹形状の場合と同様の効果が得られる。

## 【0058】

発明者は、拡散部が三角柱形状の凸形状である場合において、当該三角柱の側面と隣接する平面20aとがなす角の角度 $\phi$ と、輝度比との関係も調べた。その結果、角度 $\phi$ と輝度比との関係は、表3に示される拡散部がV型溝20aである場合の角 $\theta$ と輝度比との関係と同じであり、角度 $\phi$ が130度から150度であれば、輝度比を1.05以下にすることが分かった。

## 【0059】

また、拡散部が三角柱形状の凸形状である場合において、入射部20において平面20aが占める割合Dと輝度比との関係を調べた結果、拡散部がV型溝20aである場合と同様、入射部20において平面20aが占める割合Dを35%から55%の間の値とすると、輝度比を1.05以下にすることが分かった。

## 【0060】

○ 導入部18の大きさは、表1に示されるものに限定されるものではなく、

点状光源 15 の大きさや数、及び導光板 14 の大きさ等により適宜変更が可能である。この場合において、導入部 18 が表 1 に示されるものと相似形であれば、角度  $\alpha$ 、角度  $\theta$  および割合 D の最適値は、上記に示されたものと同じとなる。

#### 【0061】

○ 反射面 22 に対向して又は接触して、反射シートや金属蒸着等による反射部材を設けてもよい。この場合、反射面 22 に到達する全ての光が採光部 19 に向けて反射され、反射面 23 を通って外部に漏れる光がなくなるため、光の出射効率をより高くすることができる。

#### 【0062】

○ 反射部は平面状の反射面 23 としたが、反射部は平面状に限られる訳ではなく、例えば導光板 14 の外部に向かって凸の曲面や、多数の平面を組み合わせたものであってもよい。この場合、曲面の曲率や、多数の平面のそれぞれの向きを調整することにより、反射部で反射した光のうちより多くを、導入部 19 の幅方向に延びる面 24 とほぼ垂直にすることができる。

#### 【0063】

○ 採光部 19 の反射面 19b に V 溝又は鋸歯状の溝を形成する代わりに、拡散ドットを設けたり、体積散乱を利用した採光手段を設けてもよい。体積散乱を利用した採光手段とは、採光部 19 を構成する透明性の高い材料、即ち導光板 14 を構成する透明性の高い材料中に気泡又は導光板 14 の材料と屈折率の異なる材料製のビーズを分散させることにより、光（可視光）を反射あるいは屈折させる機能を有するものを意味する。

#### 【0064】

○ 導入部 19 上に、V 型溝 20b を等間隔で設けたが、V 型溝 20b の間隔は等間隔でなくてもよい。例えば、V 型溝 20b の間隔を調整することにより、より輝度ムラを低減することができる。これは、拡散部として V 型溝 20b のような凹部を設けた場合に限られず、凸部を設けた場合も同様である。

#### 【0065】

○ 導光板 14 の材料としてガラスを用いたが、ガラスに限られず、透明な樹脂であってもよい。

**【0066】**

○ 導光板 14 は採光部 19 の厚さが導入部側から反導入部側に向かって次第に薄くなる構成に限らず、一定の厚さであってもよい。

**【0067】**

○ 導入部 18 の数は 6 個に限らず、採光部 19 に要求される幅に対応して適宜増減してもよく、複数に限らず採光部 19 の必要な幅が狭い場合は 1 個であってもよい。

**【0068】**

○ 点状光源 15 として LED 以外の光源を使用してもよい。

**【0069】**

以下の技術的思想（発明）は前記実施の形態から把握できる。

**【0070】**

（1） 請求項 1～請求項 8 のいずれか一項に記載の導光板を備えた面光源装置。

**【0071】**

（2） 前記技術的思想（1）に記載の面光源装置を備えた液晶表示装置。

**【0072】****【発明の効果】**

以上、詳述したように、請求項 1～請求項 8 に記載の発明によれば、導入部へ入射する光の損失を少なくして、しかも採光部にその幅方向と直交する方向に入射する光の量を増やすことができる。

**【図面の簡単な説明】**

【図 1】 （a）一実施形態の導光板の模式平面図

（b）（a）の導入部を示す部分拡大図

【図 2】 液晶表示装置の模式図

【図 3】 作用を示す部分拡大図

【図 4】 作用を示す模式平面図

【図 5】 他の実施の形態を示す部分拡大図

【図 6】 従来技術を示す模式図

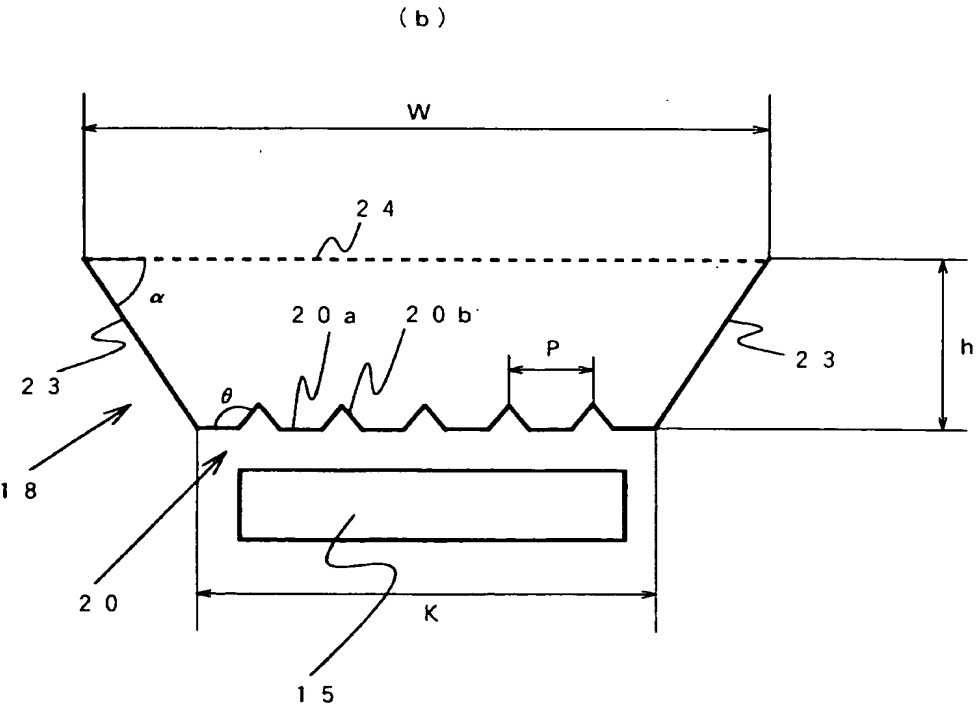
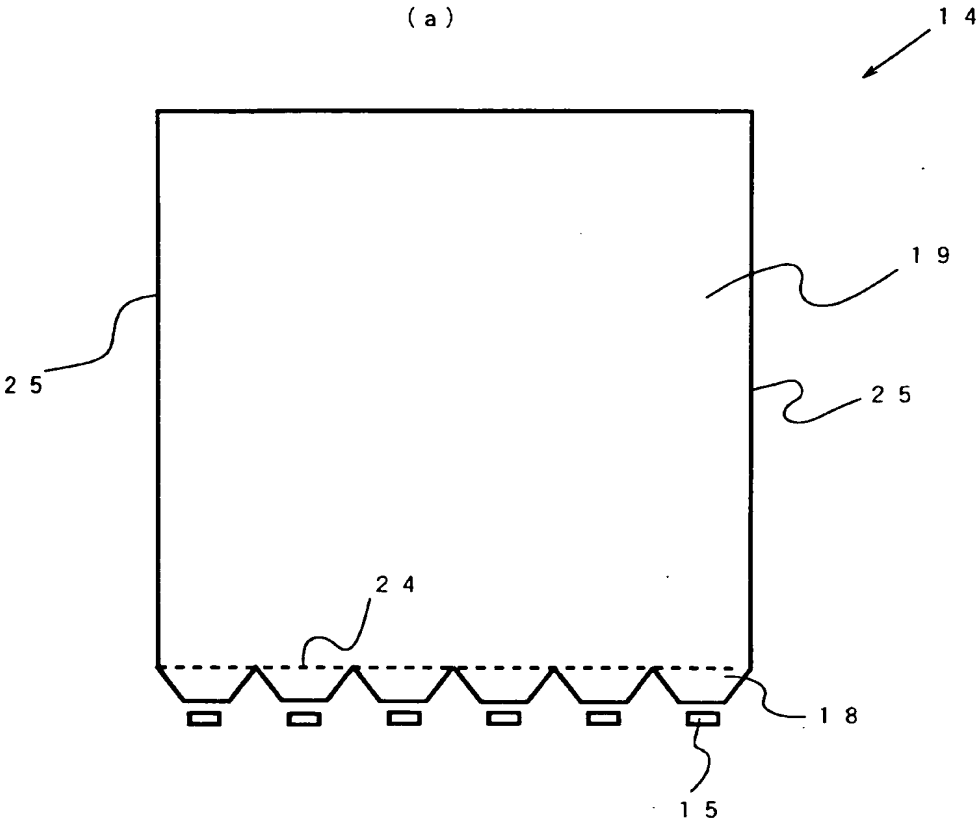
## 【符号の説明】

$\alpha$  ,  $\theta$  …角度、D…割合、1 4 …導光板、1 5 …点状光源、1 8 …導入部、1 9 …採光部、1 9 a …出射面、1 9 b …反射部、2 0 …入射部、2 0 a …平面、2 0 b …拡散部、2 3 …反射面、2 4 …導入部の幅方向に延びる面、2 5 …端面。

【書類名】

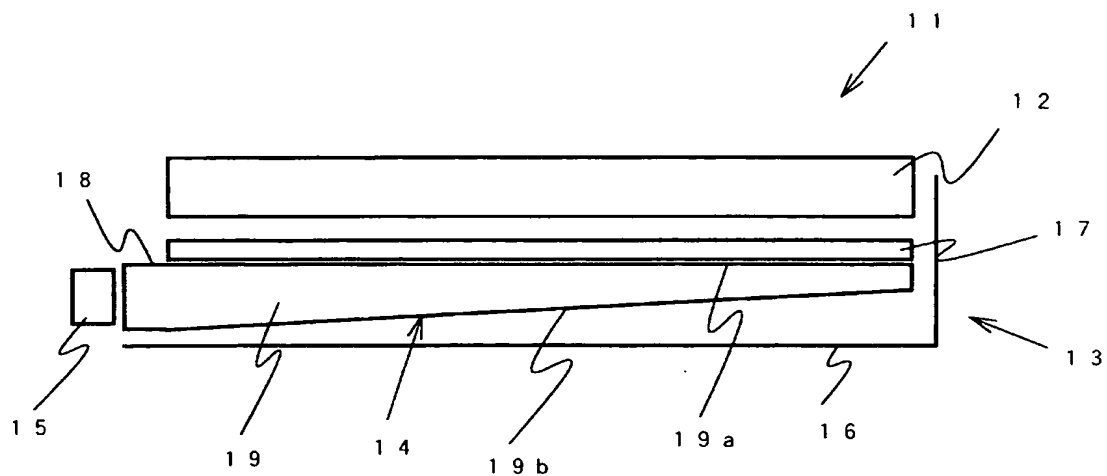
図面

【図 1】

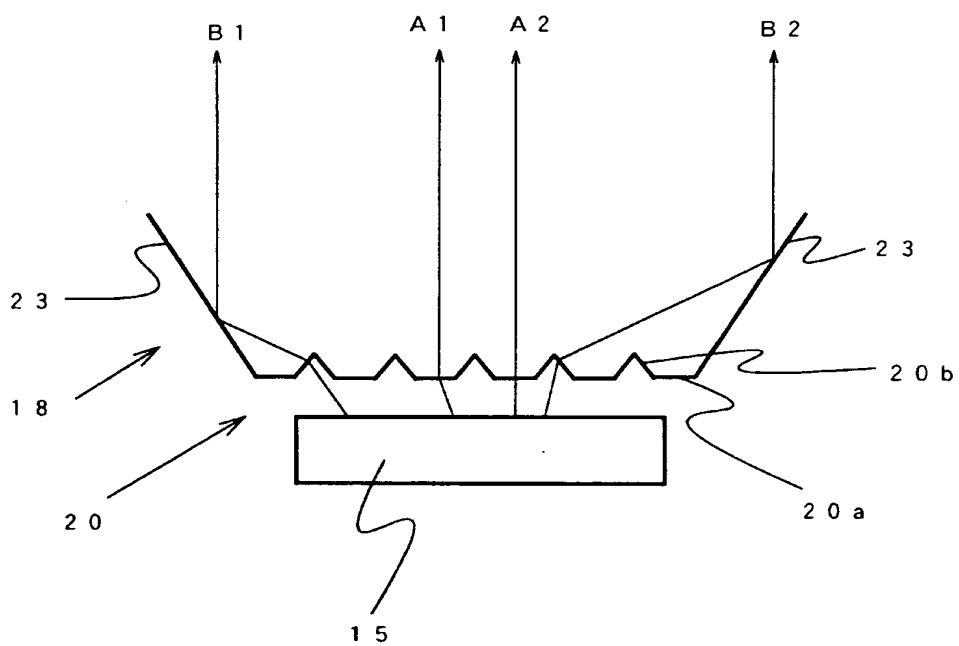




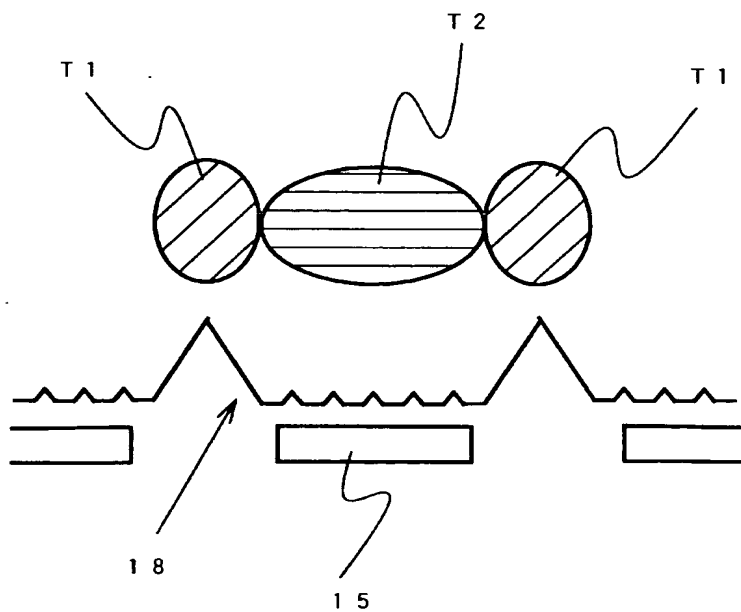
【図 2】



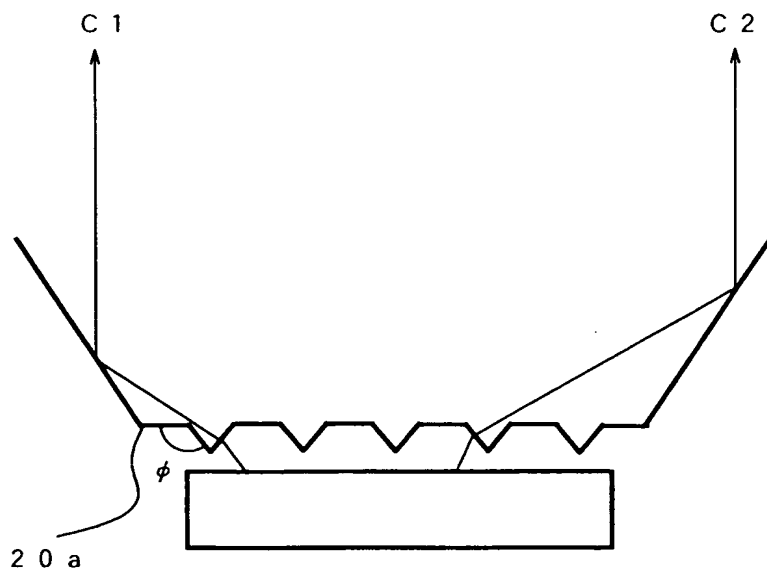
【図 3】



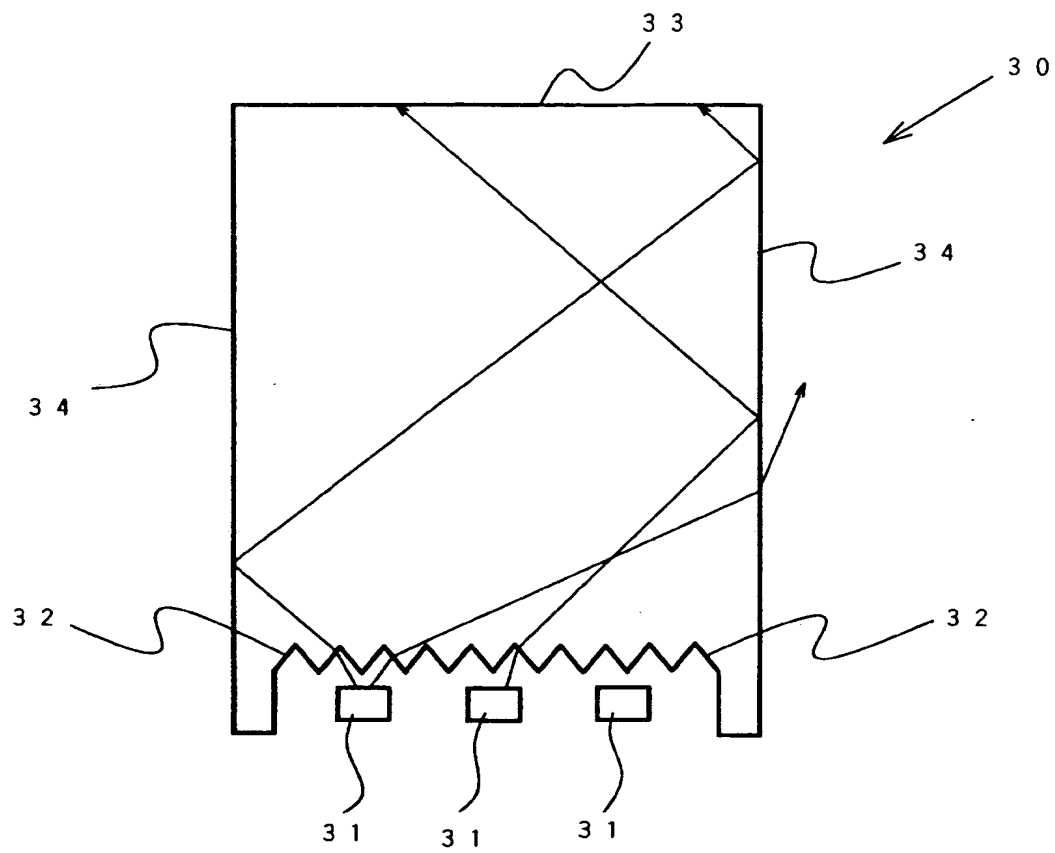
【図 4】



【図 5】



【図 6】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 点状光源を用いた導光板において、出射効率を低減させることなく、出射される光の輝度ムラを低減する。

【解決手段】 導光板 14 は、入射された光を拡散させる導入部 18 と、導入部 18 に連続して形成され、導入された光を出射する出射面 19a 及びその反対側に形成された反射面 19b を有する板状の採光部 19 とを備えている。導入部 18 は、その反採光部側から採光部 19 側に向かって拡がる対称形状に形成されるとともに、反採光部側端部に、入射部 20 を備えている。入射部 20 は点状光源 15 と対向するとともに、導入部 18 の幅方向に延びる面 24 と平行な平面 20a と点状光源からの光を拡散させる V 型溝 20b とが交互に等間隔で繰り返して構成されている。入射部 20 と採光部 19 との間には、採光部 19 に向けて広がるように反射部としての反射面 23 が形成されている。反射面 23 は平面状である。

【選択図】 図 1

特願 2 0 0 3 - 0 4 0 0 5 4

出 願 人 履 歷 情 報

識別番号

[ 0 0 0 0 0 3 2 1 8 ]

1. 変更年月日

2 0 0 1 年 8 月 1 日

[変更理由]

名称変更

住 所

愛知県刈谷市豊田町 2 丁目 1 番地

氏 名

株式会社豊田自動織機